

第2回 おおだ教育魅力化推進会議「おおだ未来☆夢ランド」会議録

—概要版—

日時：2023年1月27日（金）10:00～12:00

会場：大田市役所4階大講堂

<出席委員>

	委員名(敬称略・五十音順)	備 考
1	● 伊 藤 謙	大阪大学総合学術博物館 講師
2	● 近 江 雅 子	ゲストハウス「湯るり」「HISOM」オーナー
3	○ 梶 谷 美由紀	株式会社「necco」代表取締役
4	○ 佐 藤 万 里	脚本家・執筆業
5	○ 武 田 祐 子	大田市教育委員会 教育長
6	○ 龍 岩 明 彦	石見銀山テレビ放送株式会社 副社長
7	○ 仲 野 義 文	石見銀山資料館 理事長
8	● 福 本 理 恵	株式会社「SPACE」CEO
9	○ 細 田 次 郎	継伝制作のニッチノーマス 代表
10	○ 松 浦 利 幸	国立三瓶青少年交流の家 次長
11	○ 三 島 裕 貴	島根大田青年会議所 副理事長
12	○ 森 本 吉 樹	イワタニ島根株式会社 代表取締役社長
13	○ 森 山 登美子	社会福祉法人亀の子 施設長

(●はオンライン参加)

【森部長】

ただ今から第2回おおだ教育魅力化推進会議「おおだ未来☆夢ランド」を開催いたします。会議に先立ちまして武田教育長よりご挨拶申し上げます。

【武田教育長】

この会議は前回も申し上げましたように、非常に急激な人口減・少子高齢化が進みつつある大田市におきまして、10年後・20年後、未来の社会がどうなっているかをイメージし、時代に乗り遅れないように大田市の魅力を最大限に生かした教育を展開してまいりたいと考え、様々なお立場の方々の教育に対するご提言をいただきたい、そういう思いで開催する会であります。今回は、この1年間大田市教育委員会を中心として新たに取組みました、教育関係の事業の特徴的な事例を取り上げて紹介させていただきます。それをふまえて、前回よりも一歩踏み込んだ具体的な実際につきましてご提言をいただければと思っております。



【森部長】

第1回の会議で皆様にご了解いただきましたように、武田教育長が議長を務め、会議を進めてまいります。

【武田教育長】

第1回目会議で、福本委員さんから、学校の教育の枠に馴染めない、あるいはそれを含めていろいろな困難を抱えている子どもたちを、ぜひこの大田市でモノづくりの人たちと交流させ、自信を取り戻したり自分の学びを見つけたりする「ゴッドハンズプロジェクト」をご提案いただ

き、この年度で実施しております。それについて、この時点のご報告をしていただきたいと思います。実施状況並びに今後の見通しについて、10分程度でご説明いただけたらと思います。

【福本委員】

ゴッドハンズの件に関しましては、大田市の皆様にも大変お世話になりました。子どもたちも宿泊先が家のような状況のなかで、7名のゴッドハンズの皆様のところにお世話になって遂行させていただきました。参加者ですが、正確な資料を出したいので、用意をさせていただきたいので、ほかの話をしておいていただいでよろしいでしょうか。

【武田教育長】

ではこの時間を使って、教育委員会の方から少し説明させていただきます。

【森部長】

今年度、大田市教育委員会が取組んできた内容をご説明いたします。まず、「大田市教育ビジョン」に基づく「令和4年度の学力育成プラン」です。これに従い、子どもたちの学力向上のために、授業改善をはじめとし、様々な取組を行っております。そのなかから、まずは、学習に対する関心・意欲を高め、自ら進んで学習に取り組む態度を育てることをめざした「本物に触れる豊かな体験活動」についてご報告いたします。そのなかで「学習プログラム」という題があると思いますが、多くの小・中学校で、様々な体験学習に取り組んでおります。連携機関は三瓶自然館サヒメルをはじめとして、多くの方々にお力添えをいただいております。学校での学習だけではできない「驚き・感動・発見」のある体験をすることで、学習内容のより深い理解はもちろん、その学びを糸口として、興味・関心を広げたり深めたりしていることが、子どもたちの感想に多く表れております。多様で豊かな体験による確かな学力育成のために、さらに取組を充実させていきたいと考えています。このプログラムの取組ではありませんが、第1回の会議で話題に上った「温泉津の緞帳」に関して、緞帳製作者の後継者であり錦織美術の第一人者でもある、京都の龍村周（たつむらあまね）さんをお招きして特別セミナーを開催しました。緞帳や錦織のお話とともに、めったにできない機織り体験を、大人も含めてしております。次の資料、教育魅力化事業の取組から、「ふるさと夢未来講演会」について紹介いたします。これは昨年度から行っているもので、将来の「ふるさとを担う人材の育成」をめざし、中学校・高等学校交流事業として実施しております。著名な講師を招き、いろいろな意味で刺激を与え、「夢をもつこと、夢の実現に向かって努力すること」の大切さについて学んでおります。今回の講師は研究者で、講演内容も難しいのではとの心配もありましたが、子どもたちにとって、これまで聞くことも触れることもなかった様々な事実・情報に接することができました。子どもたちの反応からも、こうした講演会を充実させていくことが重要、刺激を与えることが大切だと改めて実感しております。次は「おおだ教育月間」の取組についてです。昨年度からですが、毎年2月をおおだ教育月間としています。大田市教育委員会として、大田市民の教育に対する関心と理解を深め、家庭・学校それから地域社会が連携して大田市教育の充実と発展を図るために設けたものです。今年度につきましては、早速、明日まだ1月ですが、明日からスタートとし、この会議にご出席の佐藤万里様の講演会も予定しております。皆様のご参加、また教育月間の取組へのご理解ご支援を、お願いしたいと思います。最後、石見銀山遺跡世界遺産登録15周年の関連事業一覧を掲載しております。昨年ですが15周年の節目に当たり、本当に様々な取組を計画・実施してまいりました。全国的なメディアにも取り上げていただき、これまで以上に、石見銀山遺跡の保全と活用について、それこそ地域総がかりで知恵を絞っていかねばならないと考えているところです。委員の皆様には、いろいろとお気づきのことやご意見をおもちのことと存じます。どうか皆様のご支援・ご指導を引き続きよろしくお願いいたします。

【武田教育長】

改めてこの1年間の特徴的な取組について、簡単ではありますが部長の方から紹介させていただきました。福本先生、準備は大丈夫ですか。

【福本委員】

前回の会議では、目的と背景についてお伝えさせていただきました。大田の方では、実際に10月の19日から25日に実施をさせていただきました。実際には10日間のプログラムを遂行する予定でしたが、参加者にコロナの陽性者が出てしまい、3日間中断をして、7日間のプログラムを実施しました。続きとして3月10日から12日まで、三瓶に宿泊させていただき予定でツアーを計画しています。ゴッドハンズ自体は、リアルなプログラムとオンラインとで180名ほどの登録者があり、そのなかから大田では全国から7名、大田市から4名が参加。学年別でみると小学校3年生から小学校6年生が各1人、中学校1年生1人・2年生2人・3年生2人、高校2年生1人・3年生1人です。県別では兵庫・広島・千葉から各2人、埼玉1人、島根4名（大田市4名）と、全国から集まって開催した状況になっています。教育長にもゴッドマザーとして一言いただいたうえで、木工職人の岩田さん、そば打ち職人の小谷さん、畳職人の岡田さん、スズキファームズ鈴木さん、魚裁きの岡富商店の岡田さん、「やきもの館」、石見神楽の小林さんのところでお世話になっています。ゴッドハンズの学び方は、何故なのかという疑問をもちながら、実際に見て・聞いて・話をしながら、手を動かすことを通して、子どもたちが自ら考え感じる力を養っていくところを大事に進めてきました。心と体と頭の使い方ですが、こちらの使い方をゴッドハンズの方々を観察させていただきながら教えを請い、実際に子どもたちが試すことで、職人さんの世界に通底している「守・破・離」という手法を、子ども自身が自分を知り、なおかつゴッドハンズの皆さんから素敵だと思ったものを取り込むという形で、新しい自分に変わっていくところをめざしてやろうと話しました。型はあるんだけど、永久に正しい答えというのではなく、常にアップデートしながらやっているのが職人さんの世界であるということコンセプトに、子どもたちとそういう学びを造ってきました。実際にウエルカムツアーという形で初日には、オリエンテーションとアイスブレイクをして、2日目からは、ゴッドハンズとの顔合わせをした後、各ゴッドハンズ7名のところで、それぞれの子もたちがワークを3日間通してさせていただきました。5日目には温泉津で、龍村周さんの緞帳のお話、それから錦織物の作り方・錦織の職人の世界の話なども聞かせていただき、実際に織るというツアーもさせていただきました。販売体験のところで中断が起きましたので、3月のツアー時には、販売体験の前に2回ほどオンラインでゴッドハンズと子どもたちをつなぐフォローアップをした後に、道の駅で販売体験をさせていただきます。なおかつ、三瓶のプログラムができていませんので、そちらのツアーとサンクスパーティーを3日間で再構成する形で段取りしています。参加した子どもたちは非常に刺激を受けていて、職人さんたちの現場に実際に入らせていただいて、本物に触れるところを自分たちの学びに開いていただいたので、かなり本気で取り組んでいましたし、そうした姿を見て、大人の方が刺激を受け、ゴッドハンズの皆さんからは「またやってほしい」という声をいただいています。子どもたちにとっても、「第2のふるさと」という感覚で、温泉津の皆さん大田市のゴッドハンズの皆さんに温かく迎えていただいたことがかなり大きく、またぜひ来たいと9名中6人の子どもが3月のプログラムに参加を希望しています。ほかの地域に参加した子どもたちの声として、学校のなかでもこうした日常生活につながるような知識の活かし方が評価につながっていくと、受験勉強としての教科学習ではなく、自分たちが生きる上でどんな知識が必要なのか、それがどんな技や道に結びついているのかがわかりやすく、活動を通した学びが日常的にならないのかという問いかけが、子どもから出てきた経緯もありましたので、ゴッドハンズのような学び方が、今後学校教育のなかにも取り入れられ広がっていくことになればいいと思います。今実際に不登校等で学びの状況が保証されていない子どもたちにとっては、温かく迎えていただくだけではなくて、本物の仕事につながるような、暮らし方につながるような学びを提供できたことは非常に意義が大きかったと思います。

【武田教育長】

このゴッドハンズは、初めて大田市で取り組みました。全国に発信できる魅力的な教育のスタイル

と位置付けて、今年度、いろいろなバックアップをいただきながら取り組んでいる途中であります。感想なり意見交換、また、ご質問があればこの場でいただきたいと思います。

【細田委員】

大田市の細田次郎といいます。自分の経験で意見させてもらいますと、今の中学生や高校生は自分とは違うかもしれませんが、やはり自分に自信を無くしている状況だと思います。そこで社会に出ていろんな仕事をして自信をつけていく素晴らしい取組だと思いますが、社会に向き合う前に自分に向き合っている状況の子もいると思います。そういった子に一番大切だと思うのは、まずは自分を認めてあげること・自分を許してあげること、ありのままの自分でいいということで自分を許したうえで、そんな自分でも誰かの役に立てることがあるということを考えて、いろんなことに挑戦してみる。そうすると、人のために役立てることがあると、それは自分の喜びになることに気づくことになる。それが大切だと思い、そういったことをまず伝えてあげることが、僕はすごく大切なことだと思います。それを最初に行ったうえで、いろんな社会に出ていく取組をしていただいたら、もっといいような気がします。

【福本委員】

ご自身の体験を含めお伝えいただきありがとうございます。このゴッドハンズプロジェクトなど私たちが行っている教育事業全般に言えることですが、まず自分を知るという時間が不登校の子どもたちだけでなく、日本の教育のなかで、もてていない状況が憂慮すべきことだと思っていて、我々のプロジェクトでは必ず自分を知るところから始めています。それがアセスメントという何か診断されるんじゃないか、外部から評価されるんじゃないかという響きになってしまっていますが、そうではなくて、自分がどんなことで心地いいと感じるか、どんなことに興味をもっていて、どんな刺激に対して反応しやすかったり、あるいは自分の意見や感じたことを伝えやすい方向はどこなのかということを見つけていく。そのために、まず自分を見つめる、ありのままにいられる時間を大事にすることを、ゴッドハンズの前提として子どもたちに伝えています。そのなかで、まず自分を知り、ありのままの自分でいられる空間を、大田市のゴッドハンズの皆さんの力や環境を使いながら確保していくことをベースにおいたうえで、次に行ける子たちはゴッドハンズの皆さんの刺激を受けながら進む。自分のことは自分だけではわからなかったり、頑張りすぎて逆に悩みに入っていく子たちもたくさんいると思いますので、そうしたときに、そっと寄り添いながら自分たちの世界を広げていくのを見せてくださるのがゴッドハンズの存在だと感じています。こうしたところから、体の使い方・頭の使い方・心のもち方というものを、他の人からいいなと思ったものを見つけていく。それを実際に試せることで自分の自信がなかったところや、自分が自信をもっていたところをさらに自信をもって、これでよかったんだと思えるように変化していく。こういうところを子どもたちとしっかり話し合いをしたうえで進めてきたというのが、ゴッドハンズの実態です。まずは安心ができて安心できるからチャレンジができると、両輪で動いていくものだと思っています。今回参加できたお子さんたちは、実は不登校の子たちが半分くらいですけども、不登校傾向のある子は自己肯定感が平均より高かったりするケースがあります。実際にやりたいことが家で保障されていたり地域のなかで保障されていたり、ちゃんとサポートされている。あるいは、自分のやりたいことをある種発言できたり伝えることができる機会があるというのは、学校に行ってる・行っていないに関わらず自己肯定感が上がってくる。要は、自分で挑戦できて意思決定できるということが保障されるのが、非常に重要だとデータからも分かってきている。もう一つ特徴としては、参加者たちの自己肯定感は結構高いんですが、その一方で、抑うつ傾向が非常に高いということがあります。社会に対して所属している場所が宙ぶらりんになっているのが不登校の子たちの状況でもあるので、学校に行っていないけれども、社会にこういう形で帰属しているともう少し保証されてくると、その鬱々とした状態が解消することが起こってくると思っている。今回、大田市で初めてゴッドハンズをさせていただいて、ゴッドハンズに行ってる子たちは出席扱いできますよ、学校に行く代わりに参加をして、このなか

で学びがきちんと保証されながら社会につながっているということが、きちんと子どもたちにも親御さんにもフィードバックされると、この鬱々とした抑うつ状態が解消されるんじゃないかと思いました。子どもたちがまず安心できる場所、そのなかで信頼できる人たちが家族以外にも増えていき、なおかつそれが学校ともつながり、学校が地域とつながることで、学校に行く・行かないに関わらずチャレンジできていく状態になっていくことが非常に重要であると、ご指摘を受けさらに思った次第です。

【森本委員】

私は大田市の森本と申します。私は大田でLP ガスを中心としたエネルギーの供給をさせてもらっている会社におります。一企業人としては、大田市の未来とか、子どもたちがいろんな経験を広めて、県外に出ていろんなところで活躍して、でもやはり大田に長く居てほしい、戻ってきてほしいということも我々の課題になっています。ゴッドハンズという、1つの技術とか職に特化するという部分ではすごいのですが、我々受け側として例えばゴッドハンズではなくゴッドカンパニーという取組、受け側として何かできることがあるんじゃないか。そういうところで課題は何かないのかと感じまして、逆に今、こういう事業をやられていて、我々受け側の方に対する課題がありましたら教えていただきたい。

【福本委員】

ゴッドカンパニーという広げ方も非常にいいと思いました。今回ゴッドハンズという形にさせていただいたのは、子どもたちが自分の手で何かを生み出せるということとの相性がいいのが手仕事で、手仕事によっていけると、自然と自然環境とつなげていくのが作りやすかったので、ゴッドハンズという形でのコンセプトをさせていただきました。ただ、社会につながるということが非常に重要だと思っていますので、社会にどんな仕事をなさっている人がいるのか、どんな会社がどんな理念で、日本だけでなく世界に向けて発信されているのかを知っていくこと自体が、社会人として暮らしていく子どもたちの実学的な学びであり、職業選択であり暮らしの選択につながっていくことを考えると、学校の授業と社会があまりにも乖離しすぎているところをつないでいくのが、これからの教育だと思っています。会社でやってらっしゃることは非常に専門的なので、少しかみ砕いて、小学生なら小学生、中学生なら中学生という形で、カリキュラムにしていってコーディネーターを増やすことができれば、子どもたちが学校だけではなく学校の外に実学的な学びをしていくことができると思っています。ゴッドカンパニーのような形で、ガスのことだと物理とか化学、貿易とか地理のお話などすぐにつながっていくものもあると思いますが、そういったところでこんなカリキュラムができると、教育委員会と揉みながら、地域のリソースをカリキュラム化していく部署や、それを一緒に作ってみたいと思っていらっしゃる教育に興味のある地域の方を、コーディネーターという形で養成していく講座などが生まれてくると、会社も学校側にアプローチしやすくなり、学校に行けてない子に教育機会を開いていく・作っていくこと自体は、すぐにでもできると思っています。子どもたちの状況に合わせて、内容をマッチするようなコーディネーターのところ、実施するときに今一番大きな課題だと思っています。それともう1点、移動の問題ですね。移動は子どもたちは自由にできないので、この移動の問題をどのような形で解決するのか、特に山間部の子どもたちは手段がなく動けないことがあるので、オンラインから始めていく機会を作りながら、実際にその場に行くときにどのような移動フローを作っていくのかという課題を解消しないといけないと思います。

【森山委員】

私も精神障がい者の社会福祉施設を作って25年になるんですけど、ありのままに生きていくというのはとても難しいことだったんだなと思います。今回のこのゴッドハンズ事業、本当に素晴らしいと思いました。私たちは世界遺産のふもとで暮らしているのに、誇りをもてない市民がいると思うんです。自己肯定感が薄いですし、何故だろうと思ったときに、日本は古来から神話の歴史が続いているということのみんな知らないんです。自分が生まれた日本のルーツ、歴史を知ら

ない方が結構いらっしゃる。もう少し、生まれてよかったと思える子どもさんになるには、大人も生まれてよかったと思える人たちがいるのでは。日本人は何たるものかということが、このゴッドハンズで少しでも原点を話していただける大人がいてくださったらうれしいと思います。

【武田教育長】

ゴッドハンズの取組に対しては応援をいただいたと思っております。ゴッドハンズからゴッドカンパニー、ゴッド〇〇というふうに、様々なゴッドの集まりが、この大田市で広がっていけばという希望ももてた発言ではないかと思えます。先生、貴重な時間、ご都合をつけていただきありがとうございます。

【梶谷委員】

ゴッドハンズプロジェクト、本当に素晴らしいと思い、私もお手伝いさせていただきました。大田市の参加者が少なかったのには1つ理由があるんです。募集は不登校傾向のお子さんということで募集をかけたんです。ゴッドハンズは学び方の1つだと思いますので、学校に通っているお子さんでも、あっているお子さんはたくさんいる。学び方は学校に通っていても、ある程度形が決まってしまうと苦しい子がたくさんいて、学校に行っている子の方が自己肯定感が低いという話があったんですけど、それはちょっと無理をされていて、自分の学び方と違う学びをしている。不登校の子はある意味自分の学びとか自分の生き方を選んでいるのが、自己肯定感の違いだと思うんです。学び方ということでは、この取組のなかで使っているアセスメント、テストみたいなものがアプリでできるシステムがあって、簡単なテストで出てくるもので、これって学校に通っている全てのお子さんが試したら、自分の学び方を簡単に知ることができて素敵だと思いますので、ぜひ大田市で取り入れられるといいと思っていますのでご検討ください。

【武田教育長】

学校だけではない多様な学び方という位置づけで、このゴッドハンズがさらに大田市にとっても有効な手段になるように思っております。それではここで休憩を取りたいと思います。

— 休憩 —

【武田教育長】

後半を始めたいと思います。先ほど部長の方から、大田市教育委員会の新たな取組についていくつか紹介させていただきました。1つは、本物に触れる豊かな体験です。これは学力もですが、大田市にある様々な教育資源や教育施設と力を合わせて、あるいはもっと市外・県外の教育機関とも連携しながら、面白い授業とか新しい発見がある体験活動を大田市に充実させていけるのではないかとこの取組です。2つ目のふるさと夢未来講演会につきましては、10年後・20年後の未来社会を大人も子どももイメージしたうえで、今の自分にはない力や、先見性を身につけさせたいという思いから、時代の最先端で活躍なさっている方をお呼びして、小・中・高で意見交換をするという取組です。3つ目の、石見銀山世界遺産登録15周年記念イベントにつきましては、石見銀山課の取組を紹介させていただきました。この3つの取組の事例を踏まえてでも、先ほどの話の共通点なども探りながら、お気づきのことがありましたら発言いただきたい。2回目ですので、より具体的な取組が皆さんとともに提示できていけばいいと思っております。

【佐藤委員】

佐藤万里と申します。大田市は世界遺産・日本遺産とあり、素晴らしいと思うのですが、一方で、世界遺産でも日本遺産でもないゆかりのお寺・神社、いろいろなものがまだたくさんあると思うんです。そこで大田も、世界遺産がある日本遺産がある、大田遺産もあるよと作ってみてはどうだろうと思っています。例えば各小学校に自分たちの地域の大田遺産、こういうものがありますと、各学校5つとか10とか、各学年1つずつ出して6つとか、この何とか小学校、例えば久手小学校が選んだ大田遺産とか、そういう形で作っていくとより身近なものになると思います。鬼村の方では大家遺産というのを作ろうという話が出ているそうです。そういうことと連携しながら、各町の遺産を作っていく、大家遺産とか久手遺産とか仁摩遺産とかを作っていく、それを総括

して大田遺産と呼んでもいいと思います。まだまだ知らない、ということがいっぱいあると思うので、先ほど自己肯定感が低い、市民が市に対して誇りをもてていないみたいなお話がありましたが、こんなにいいところがいっぱいあるということ、自分たちで発見する場を作ってみたらどうかと思いました。

【伊藤委員】

今、先生がおっしゃったこと、まさに私が考えていることだと思いました。私も研究者の端くれですので、大田に関しては石見銀山を含めて調査させていただいていますが、本当に見るものが大田にはいっぱいある。まず1つとしては、いろんなジオサイトがある。2つ目としては、大田は大国主命が最初に降りられた場所ということが、いろんな部分に書かれているのに、現地に行っても全然わからない。だから私は、前にも提案させてもらったんですが、大国主、「恵比寿さん発祥の地・大田」みたいな感じで売り出しても面白いと勝手に思っています。大田には非常に魅力ある場所・歴史が山ほど詰まっていますので、そういったところを私たち委員・研究者を含めて発信していくご協力ができたらと思っています。

【仲野委員】

佐藤先生のお話に関連して、実は県立大学の授業で「世間遺産」というのをやったんです。すでに世間遺産というのが、いろいろな地域で行われていて、地域住民が、地域にかけがえのない宝物を残そうと、観光協会が主体となって認定する。市民がエントリーして、それを認定委員会が認定する仕組みがある。大田市の場合今年の12月に、文化財保存活用地域計画が作られている。これは、文化庁に認定されているので、これが文化財保存活用のマスタープランになっていくんですが、そのなかに、市民調査委員を養成しようという話があります。市民が参加しながら地域の文化財を上にあげて保存し活用するという、そういう取組が基本的な仕組みとしてこれからできているので、いかに具体的な形で実施していくかということで、佐藤先生が仰られたことが実現していくと考えられます。もう1つは、今日提示していただいた体験プログラムの件ですが、たいてい自然系とか歴史系に偏っていて、工学系とか理工学系のプログラムは高専にしかない。満遍なくプログラムが提供できる形にしていくことによって、多様な学びができるのではないかと。もう1つ思ったのは、子どもたち自身が学びをカスタマイズできる仕組みが、必要だろうと思います。そのうえで、どこに帰属するかという問題でいえば、地域全体が学校であるなら、今自分たちが通っている学校に帰属する必要はなく、地域に帰属することで子どもたちの多様な学び、あるいは子どもたちの居場所が作れるかもしれない。そういう意味で、学校の在り方を根本的に変えるような発想をもっていく。アクセスの問題は、ここ5年とか10年の話ではなくもっと長いスパンで見たときに、子どもたちのある意味学校は乗り物であって、教室は実際にはそれぞれのフィールドである可能性もある。だからもう少し長いスパンで世の中の変化を見据えながら、学校の在り方・学びの在り方を考えていくのも、本当は必要なことじゃないかと思いました。

【梶谷委員】

満遍なく学べる、いろいろ知れてそのなかから子どもたちが選んでいけるチャンスがあるというのが大事だと思う。大田市として、本物に触れる学びがあると資料を見せていただきましたが、1つ思ったのは、各学校での学びが偏っていると思って、それはよく言われる「担任ガチャ」という、その時の担任の先生とか校長先生の方針で変わってくる。どうしても公立学校は、そこが定着しないというのが、親としても「当たりはずれ」になるんです。そうでなくて大田市では、例えばサヒメルに行けば学芸員さんから地層について学べると、そういう保証がある。これから学校再編が進んでいって学校数が減っていくかもしれないなかで、ある意味そこはチャンス、その学校にいけばサヒメルでしっかり学べる、こっちの学校に行けば大森のことがとことん学べると特色にしていくというチャンスでもあると思っています。そこを学校だけに託してコース・回り方を決めてもらうだけではなく、そこに行けば学べるというものを、ある程度大田市の方針

として決めていくと、当たりはずれがないんじゃないかと思います。

【仲野委員】

アクセスの問題がありましたね。大田市には学ぶ施設だとか環境はすごく整っていますが、そこになかなか子どもたちが行けないという現実がある。であるならば、例えば小学校の6年生全員に、市内のバスの無料パスを与え、そのパスを利用して、子どもたちが自分でバスを利用して現地に行って学ぶということもあるんじゃないか。そうすると、どうやってバスに乗ったらいいかも分かるし、そこに行くまでにどれだけ時間がかかるか、自分で計画を立てて学ぶことができるかもしれない。逆にアクセスが悪いことを逆手に取りながら、それもまた学びの教材として活かしていくこともありじゃないか。小学校6年生全員になるとお金が相当かかるかもしれませんが、交通事業者にも協力してもらい、子どもたちの学びのためにあってもいいと思ったりします。

【伊藤委員】

博物館に行くという、地域の歴史的な資源に接するハードルを下げるという意味でもアクセスの問題は大きい。そこがクリアできるといういろいろ変わってくると感じました。私も博物館にいますので、実際に自治体から放課後の教育の部分を少しもってくれと、そういう提案も受けますが、人的なソースも含めてなかなか割けるものがない。ここは仲野先生に伺いたいですが、実際どういうサポートが得られれば、子どもたちの受け入れがよりよくなるのか。館を運営されている視点からいくつか挙げてもらえると、具体的な行政の動きとかがやりやすくなるのかと感ずるのかがいかがでしょうか。

【仲野委員】

1つは人的な問題というのはあると思います。博物館だけが子どもたちを受け入れるのではなくて、学校と博物館の間に立って、それをサポートしていただける体制というのは必要かと思えます。あとは、完全に任せっきりということがあるので、受け入れるにあたって学校と密に連絡を取りながら、連携を取りながらやっていく体制が必要。学校としてはここでの学びに何を期待しているのか、そういったことがわからないままこちらで勝手にプログラムを作ってもいいのかということもあります。そういう意味では、コーディネートできる人材が必要だと思っています。

【武田教育長】

後半部分を少しまとめると、大田遺産とか世間遺産ですね、改めて子どもたちが地元、自分が生活している足元をしっかりと見つめて、そこに誇りをもつための取組もいいのではないかと。あるいは、大人としても地域の調査員の育成に向かえばいかがかと、というご提案がありました。また体験的な取組をするにあたって、それを学校任せにしている状況が、様々な学びの偏りを生んでいるのではないかと。もっと大田市教育委員会として、これだけはこのところで、そのプログラムを作っていく発想が大事ではないかと。そしてアクセスの問題等の提案がありました。それらについて深めていきたいと思いますが、何かご意見がありますでしょうか。

【森本委員】

佐藤先生が仰ったように地元の遺産・地元の歴史、これに本当に興味をもたないと、いくら受け側を整備しても行きません。以前、岩手県に勤務していた時期があり、三陸側は過去からいろんな地震の被害があつて、向こうは「てんでんこ」と言つて地震があつたとすぐ、てんでばらばらに高台に上がれという、そういう教化がちゃんと行き届いている。だから子どもたち、すごく詳しいんですね。そういう興味をもたせる、いいこと悪いこと含めて、この町ではこんなことがあつたんだと、授業の中では難しいと思いますが、それぞれの地域でその町で、わが住んでる町で何があつたんだということに興味をもつ。そうすると石見銀山につながったり温泉津の漁港につながったり、じゃあ見に行つてみよう勉強してみようとなると思いました。何かそういう町の取組・地域の取組ができたらと今感じています。

【森山委員】

この大田は石見神楽があると思うんです。子どもたちが舞を舞うのを見るのが私は大好きですが、

これは宝物だと思います。私たちは笛・太鼓が聞こえてくると気持ちが躍るんです。子どもたちが、あんなふうに目を輝かせてやっているのを見て、何かいいことにつながらないかと、素敵なたでんでんこの話を聞いて思いました。

【武田教育長】

子どもたちの体験していることと、学校や社会で学んでいること、それを結びつけていけるお話ではないか。大田遺産とか何とか遺産というもので、子どもたちが自分たちで意識して、よそにアピールしながら、実は大田市のすべてにかかわる宝物のような形でまとめていく。そこに、大人もかかわって作っていけるようなものが1つできればいいなと私自身感じた次第です。そういう取組を、今学校にお願いしていますが、やはり教育委員会としても、今ある様々な施設の人たちとタッグを組んで、大田市の共創のプログラムとして高めていきませんかという提案をさせていただいている。1つは、銀山学習とか世界遺産学習で非常に協力いただいています。さらに、委員の皆様も連携いただいて、よりいいものを作ろうとしていただいています。もう一方で、本物に触れる生の体験のアンバランスさも教えていただきました。その部分も、三瓶青少年交流の家の松浦委員さんと教育委員会も話させていただいています。ここもいろいろな体験プログラムをもっていらっしゃるので、大田市としても力を合わせて共通のプログラムができないかとお話させていただいています。

【松浦委員】

国立三瓶青少年交流の家の松浦です。いろんな発想をお聞きして、学校教育とこの地域社会教育をどう結び付けていくのか頭のなかで錯綜し、うまい意見が自分のなかでまとまらずにいるところですが、いろんなアイデアをいただいています。学校の教員からすれば、それまた私たちがやる？ 私たちに余力はないので、この発想は大田市なり地域の方々がやっていただくしかないと思うんです。さらに学校現場は、学習指導要領できちんと固まっていて、授業はきちっとしないといけない。教員はその授業の準備にも追われる。さらに事務的なこともあり、新しいものを取り入れてエネルギーに自分がリードしようという余力は、正直もうない状況です。学校は日々の授業を組み立てるだけでも精一杯なので、授業と社会のこういった体験・触れ合いを、どうつないでいくのかは、やはり教員以外の方々がしっかり考えていただき、三瓶青少年交流の家での宿泊を基点にして、大田市と地域のそれぞれのスタッフの皆様が連携をとるような協定作り、そういったものをカチッと固めることによって、学校にどうぞこういうプログラムがあるのでやってみませんか、というシステムができれば、学校がこれ以上のエネルギーを出すことはないという気がします。学校側から言わせれば、今カリキュラムマネジメントが課題となっており、例えば社会と国語がタイアップした授業計画を作れないか、それを地域の方々と交わりながら計画して、少しでも学校の先生を楽にしてあげたいと、皆さんの話を聞きながらつくづく感じたところです。学校の業務をもう一回スクラップして立て直すことも、まず校長先生を中心として大事だと思います。ですから、頭の固い学校の教員を地域の皆様に砕いていただいて、これから大人になっていく子どもたちに必要な力は、計算能力が高いだけじゃない、漢字がたくさん書けるだけじゃないってところを、教員に教えてほしい。いろんなお話をいただいたので、これ全てが学校の教員や子どもたちに浸透していけば、真の令和の日本型教育がめざす「生きる力」が育まれると思います。そういう意味で、大田市が他の市町村に先駆けて、学校と社会をうまくタイアップさせたような展開を、協定を結び取組まれると、非常に波及効果が大きい気がしています。

【武田教育長】

交流の家と大田市教育委員会と提携を結んで、そういう体験的なプログラムを構築していきたいと思っておりますが、皆様いかがでしょうか。

【梶谷委員】

こういう話をしていくと結局先生方の負担が増えるということが頭にあったんです。ただここは、先生たちもっと工夫してよという話ではなく、地域の住民や事業者も変わってほしいということ

を話したかったんです。高校魅力化推進にも関わらせていただいています、地域の事業所としてかかると、どうしてもボランティアになっていくのが、地域側からするとどこまでやるのかみたいなことが課題にもなっている。そこに、動いたものがみんな損をしないプログラムを作るということに関して、それは業務でありきちんとビジネスになっていくということが大事だと思う。そこを思いがある人は、どうしてもタダでもやるみたいなのところがあり問題だと思う。そうではなく、魅力化していくにあたり、予算が何かの形で確保できる形を作って、いろんな事業者さんが関わりながらプログラムを作っていく。もちろん、サヒメルのような専門家の方がおられる事業もあるし、私が池田小学校でやったような事業もすごく勉強になると思うんですが、どうしてもそこにタダではできないものがある。事業者が絡んでやる事業に関して、きちっと誰も損をしない形で子どもたちが学べる授業が作っていただけたいと思う。その予算の部分はどう確保していくのかは、考えてみたらいいと思います。

【武田教育長】

ウイン・ウインの関係で、そのプログラムを作っていければと思いますし、財源の確保の問題は非常に重要で、いつかこのテーマで、財源については皆さんにご意見を頂戴したいと思っています。

【佐藤委員】

財源の確保のことですけど、私は自分が本好きなので、例えば大田の子どもたちに図書館の本・学校図書室の本を増やすにはどうしたらいいか考えたときに、ふるさと納税とは違った寄付の仕組みを作れないかと思っています。寄付する側の気持ちからすると、自分の寄付が何に使われるのか、こういうことに寄付したいんだという思いが実現できることが大切だと思ったんです。例えば、各学校からこの本が買いたい。例えば、ハリーポッターのシリーズ全10巻買いたい、鉱物の図鑑が欲しい。これを寄付してくれる人がいますか、いくらですと具体的に出してもら。自分はハリーポッター好きだから、この小説に寄付しよう、自分は理科が好きだから、理科の図鑑に寄付しよう、具体的に選べる寄付の形を作る。私ずっとフォスタープラン、今はプランインターナショナルジャパンという里親制度で寄付していますが、あれで寄付をしている人は、何故それを選ぶかという、自分が寄付している対象の子ども一人一人とマッチングして、その子の成長記録・手紙が届くという仕組みになっている。それで、フォスタープランに寄付する人が結構いらっしやる。だから自分はハリーポッターシリーズに寄付しました。ハリーポッターを読んだ子どもが、ここがよかったです、みたいな感想、はがき1枚で一言でもいい。そういうのが来ると、ああ良かった、次もまた違う本を寄付してみよう、みたいになると思うんですね。そういうふうに、この本はこのプロジェクトで、東京に住んでいる〇〇さんから寄付されました、というようなものを添付して、顔の見える寄付の形をやればいいと思ったりします。また仲野先生からもバスの無料パス、これはすごくいいと思います。私自身、自分を振り返っても初めて公共の乗り物に乗って、どこかに出かけたのは小学校5年生の時だったと思います。すごくドキドキするけども、切符買ったりバスでお金を入れたりして乗る。それで目的地に行って何か物を買うなり何なりして、帰ってこられた。この体験というのはすごく大きかったと思います。そういう意味でも無料パスというのは、ぜひ実現してほしいと思います。これも予算が絡む。そうすると、その無料パスについて寄付したい人に対して、その無料パスを使って自分はどこそこの博物館に行きました、こういうことが印象に残りました、みたいな感想を一言でいいから何かメッセージが届くと、またやろうというふうな工夫がしていけるといいと思ったりしています。

【武田教育長】

財源にかかわって、具体的な提案をしていただきました。JCも子どもたちの子育てとか教育に非常に興味をもっていただいている、その取組を進めていただいています。JCの取組を含めて三島さんご発言いただけたらと思います。

【三島委員】

一般社団法人・島根大田青年会議所で活動しております三島です。私たちは2021年に大田市民会館にいろんな職業の職人さんを集めて、大田市の子どもたちに体験してもらい、そこで郷土愛を子どもたちに育んでもらい、一度外に出ても大田市に帰ってきてもらえるような形で事業を行いました。今年度は、そういう青少年事業・まちづくり事業を2つやろうと考えており、そこでは子どもたちの夢を応援することをテーマに、事業を構築していく。教育委員会に協力いただいて、大田市の全中学校にアンケートを配らせていただいて、そこから、子どもたちがどんな夢をもっているのか、そして夢について自分たちがどう考えているのかなど、アンケートの結果によってどういう事業をしていこうかと構築しているところです。子どもたちがいろんな夢をもっていると思うのでそれを応援する、どんな夢をもっているでも応援する大人の寛容性が非常に重要になってくると思っております。どこのデータかわからないですが、島根県は寛容性が低いという話があり、子どもたちがどんな夢をもっているでも、それを応援できるような環境を作っていきたいと考えております。

【武田教育長】

JCの皆さんは、子どもたちに一番近い若い皆さんです。ぜひいい連携ができていけばと思います。大田市には子育てとか教育の取組に軸足を置いて活動をなさっている、あるいは、なさろうとしておられる方々がたくさんおられる。そのお力にすがって、教育委員会も学校も、そういう動きができていけばと思っています。そういう意味で、今温泉津でまちづくりに取組んでいらっしゃる近江さん、ご発言いただけますか。

【近江委員】

温泉津に住んでいます近江雅子と申します。温泉津でゲストハウスを何軒かと飲食店やコインランドリーを運営しています。西念寺という浄土宗のお寺も務めていまして、観光を入り口としたまちづくりに取組んでいます。温泉津で今取組んでいる1つとして、まさに明日・明後日ですが、「温泉津百人会議」という会議を行う予定になっています。温泉津小学校の先生方にも協力していただき、子どもたちにアンケートをして、「温泉津ってどんなところ」を紐解くところから、子どもたちに温泉津の魅力を話してもらい、どうやったら実現できるかという内容で、会議をする予定になっています。子どもたちのアンケート内容を見たら、本当に夢のあることがたくさん書いてあり、それをどうやって実現していくかを一緒に考えていながら、温泉津愛を育み成長してほしいという会議になっています。私の仕事の観点から申しますと、温泉津には観光に来られる方・宿泊の方が多いんですけど、そういった方々が何度も何度も訪れてくださる町をめざしています。人口減少がどんどん進んでいますが、そういった人たちのなかから温泉津や大田を好きになってくださる方々が、Iターンで入ってきてくださる状況が生まれつつあります。子どもたちも、温泉津で生活していたら会うこともできない職種の方と出会ったり、東京で住んでいる方々のなかに入り込んで、知らないことをたくさん教えていただいているのが、すごくいい環境だと感じています。温泉津とか大田市はすごく環境が良くて、子育てしやすいと思っておりますが、保育園ぐらいなら休ませて一緒に2週間ぐらい滞在し、田舎で子どもたちを生活させながら自分もリモートワークで仕事ができると思うんですが、小学校とか中学校に上がってしまうと、学校を休ませてまで来にくいという状況があります。そこで温泉津小学校でリモートワークの人たちのお子さんを受け入れられるとか、中学校も2週間あるいは短期留学という感じで受け入れられるという環境を整えば、もっとたくさんの方が二拠点生活・リモートワークをはじめ、お子さんと一緒に大田市を訪れて中・長期滞在することで、環境や良さを実感し、もっとIターンしやすくなる環境が整うんじゃないかと感じているところです。

【梶谷委員】

このことは既にできる、お試し転校みたいなのが、小学校とかは受け入れ可能だったような気がします。これって、もっと表に出していったらいいですね。今温泉津すごい多いですけど、三瓶も山村留学があります。年間だけでない受け入れがあれば来れるという声もあったんで、これを

機にそういうこともできると思いました。すでにもう施設はあるわけですし、すぐに取り組めるんじゃないかと思いました。

【武田教育長】

子どもを1週間から10日、大田の学校で滞在しながら自然を満喫して帰りたいと、何年か前に温泉津小で、今年度は大森小でと何回かされたご家族もありました。先ほどの温泉津の百人会議は、他のエリアでも少し広げていけるような1つのプランでした。先ほどありました、短期間・中期間の滞在もしながら、大田市の学びのなかで様々な優れた教育環境に浸って帰っていただくということも、ご提案いただきました。近江さん、温泉津小の子どもたちにアンケートを取られたそうですが、どんな温泉津愛が具体的に出てきたか、少し教えていただけますか。

【近江委員】

小学校1年生から6年生までですので、質問の内容は、「もし自分の大事な方が来た時に自分はどこに案内するか」ということが1つ、温泉だったり、自分の好きなここで夕陽を見る、ちょっと嬉しかったのはWATOWAに連れていくとか、そんな意見も出ていました。それと「自分が社長だったら温泉津のなかにどんな店を作りたいか」という質問をしました。ディズニーランドみたいなのを作りたいとか、それって掘り下げていくと、人がたくさん集まる場所を作りたいのかとか、いろんな意見が出たんですが、今度の百人会議でそれを掘り下げて、ディズニーランドみたいなのはできないけど、例えばこういう場所だったらできるのかなと、そういうのを一緒に考えていきながら、大人も夢をもって今後の温泉津を楽しく住みやすい場所にして、子どもたちにもまた外に出て帰りたいと思うような温泉津になればと思っています。

【武田教育長】

子ども心がすごく出ていて、ワクワクした気持ちで子ども自身がまちづくりに参画していくという、1つの提案と思って聞かせていただきました。ここに住む大人たちこそ魅力的な生き方をしたり、前例にとらわれない新たな夢をもってチャレンジしていく姿を、子どもとともに見せていくことが、大きな魅力化ではないかと思っています。今日は、非常に具体的なご提案をいくつかいただきました。1つは大田遺産を子どもの手で作っていく取組、そのためにアクセスの悪い大田市ではあるけれど、それを逆手にとって無料バス等の発行という取組ができるのではないかと。学校に任せてきたふるさと教育を、あるいは体験学習を、大田市の教育・明日の教育を作るという視点で学校再編と絡ませて、共通なものを作っていくたらどうか。子どもの声でまちづくりをしていく。それに大人もエネルギーをもらうという百人会議や中・長期の滞在等々、具体的な提案をいただいたと思います。この他に、財源的なご提案もいただきましたので、これはより深めてお話がしていけたらと思っています。具体的なものを1つでも2つでも見える化していきたいと思えますし、それぞれの団体や場所で、ぜひ同じスタンスで1つ2つの提案あるいは事業ができていけば、そしてそれをつなげていければと思っていますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。本日は皆さんどうもありがとうございました。

【森部長】

皆様方のご意見、これをこの会で終わらせることなく、教育委員会部内でしっかり話し合いをして、1つでも具現化・具体化がなるように、そういうことでこの会の意義を高めていくことも必要ではないかと思っています。以上で第2回おおだ教育魅力化推進会議「おおだ未来☆夢ランド」を終了いたします。

